

## 第五章 結び

日本にとって、日清戦争以前における伝統的なアジア観というのは即ち儒教文化への尊敬から中国に憧れるといったものである。だが、一八四〇年のアヘン戦争の結果、中国の敗北は従来中国崇拝の感情に変化を起こさせ、日本に大きな衝撃を与えた。その後、植民地化されないように、中国と日本は各々西洋化という方向へ向かい、自国の真の独立を計った。その時の日本は明治維新の進行に伴い、従来伝統的なアジア観に挑戦しようとしつつ、遂に日清戦争をきっかけにその伝統的なアジア観を完全に一変させた。福沢諭吉と内藤湖南は即ちこの様な背景において育てられた人物である。

ところが、その様な二人には、アジア観に関して全然違った視点が見える。とりわけ、日清戦争から延長して現れた中国に対する観点や植民地に対する処置に大きな差異がある。前述した様に、福沢諭吉は日本の文明開化の先駆として旧文明である中華文化を「極度に排斥する」立場に立ち、アジア諸国を蔑視しながら侵略を肯定することを主張した。それに比して、内藤湖南は旧文明である中華文化を「重視し尊敬する」態度をとり、文明化した日本が東洋の使命を帯び、それは即ち半植民地化されている中国を救った上で東洋文明を改革し、遂に中国の代わりに東洋文明の新たな中心となるという理想を提唱した。その二人の台湾論における史的な引用からも彼等の中華文化に対する観点の相違を見つけることができる。福沢が引用したものは殆ど日本史からであり、例えば日本戦国時代における敵国の豪族に対する処置を現在における台湾豪族の処置の手本とすることである<sup>1</sup>。それに反して、内藤はよく中国の歴史から事例を引用し、蜀國における諸葛亮の治理を台湾における課税の方法と税金の用度の模範とすることを建議した<sup>2</sup>。

その様な彼等の中国文明観の違いが、台湾像を異なったものにしたと考

<sup>1</sup> 福澤諭吉、慶応義塾編、〈臺灣の豪族〉。『福澤諭吉全集』第十五巻、P. 278。

<sup>2</sup> 内藤湖南、〈革新雜議（六）財政の措畫（下）〉。『内藤湖南全集』第二巻、P. 435。

えられるかもしれないが、まったく違ったものだとも言えない。福沢と内藤との台湾論の分析を通じて以下の様に纏められると考えられる。

## 1、台湾植民地の獲得を肯定

日本の近代植民地帝国としての出発は、日清戦争の戦利品としての台湾領有に始まる。その様な画期的な時代を迎えた福沢と内藤は、日清戦争そのものに対する見解は違ったものの、戦勝の雰囲気によって喜びを顔に表した。鹿野政直によれば、日清戦争の場合には、日本国内では戦争反対の運動はなかったといわれる。彼は戦争支持に二つの立場があったことに注目したいと述べた。その第一は、この戦争を以って眠れる中国を目覚めさせるためのものとする立場から戦争支持である。その立場を取ったのはその頃国粹主義者と呼ばれた人々であった<sup>3</sup>。内藤湖南は即ちその一人であると考えられる。前述した様に、明治二十七年（1894年）に内藤は日清戦争が偶然の事件であり、戦争という最悪な結果に至ったことは実に見たくなかったことであると語り、福沢の様な積極的な戦争支持者の姿を示さなかった。しかし、その様な態度を示したものの、日清戦争に反対したわけではなかった。彼によると、中国を野蛮と見なした見方はもう一度考え直さなければならない課題であり、「時代変遷」の観点から中国文明を分析し、旧中華文明は即ち野蛮であるといった言い方を批判した。加えて、日本は中華文化を吸収したことがあるゆえ、現在において中国が改革を急いでいる際に日本によってその改革をなし遂げ、中華文化を復興するのが最も適切なことであると主張した。この様に、内藤湖南は国粹主義者であると同時に消極的な戦争支持者でもあるといえるであろう。ところが、明治三十年（1897年）八月《台湾政治の大目的（三）》という一文に、

「……其の大任を行ふに當ては、則ち其の報償せらるる所も亦大ならざるを得ず、其の進行の路を沮格するあるが若きは、斷然の処置、之を干戈に決するを妨げず、我が清國に加ふる所以の者、其れ然ら

<sup>3</sup> 鹿野政直、『福沢論吉・人と思想』、1982年、P.175。

ずや。」<sup>4</sup>

の様に、内藤は清国を文明宣布の障害と見なし、その妨げを撤去する時には思い切って武力を使うべきであると明言した。内藤湖南は清国が守旧の代表ではないと反論した一方、清国が日本文明宣布の障害であるため、武力でその妨げを撤去しようと提唱した。ここではその心境の転換の原因に注目したい。内藤湖南は台湾に来る前に、中華文化の地を踏んだことは一度もなく、台湾に来てからこそ踏み始め、そして自ら台湾において風土を体験したのちにその転換をしたのではないかと考えられる。

一方、第二のタイプの戦争支持者は福沢のように日清戦争を「文野明暗の戦」<sup>5</sup>とする者であり、その文明と野蛮の戦いによって日本における文明開化の成果を世に大変な意気込みで披露しようとした戦争推進者でもあった。日清戦争当時の外務大臣であった陸奥宗光もこの戦争の原因を「西歐的新文明と東亜的旧文明との衝突」<sup>6</sup>と捉えていた。こういう論調が東洋における新文明と自称している日本にその意気衝天の勢いで旧文明であるアジア諸国への全面的侵略に繋がり、やがて大東亜共栄圏といった理想の基調となった。

そこで、日清戦争の支持者か否かを問わず、台湾統治の成敗は即ち日本帝国の発展において最も重要な点であることについて、福沢と内藤は共に異議なくそれに賛同の姿を示した。福沢は「……此天恵地福を其儘にして蠻民等の手に付するを許さず、大に内地の人民を移住せしめて其富源を開発するこそ文明の本意なれ」<sup>7</sup>といい、それに対して、内藤は「此に知る、我が興隆の運、或は将きに天の選ぶ所たらんとす、而して其の境を拓て異種の民と接触するは、實に臺灣より始まれば、即ち臺灣の経営、決して軽々に視ること能はず」<sup>8</sup>と語った。要するに、二人とも台湾領有を天意と見なして台湾の経営を慎重に、決して油断してはいけないと明言した。また、

<sup>4</sup> 内藤湖南、〈台湾政治の大目的（三）〉。『内藤湖南全集』第二卷、P. 406。

<sup>5</sup> 鹿野政直、『福沢論吉・人と思想』、P. 171。

<sup>6</sup> 前掲、『福沢論吉・人と思想』、P. 176。

<sup>7</sup> 福澤論吉、慶応義塾編、〈臺灣永遠の方針〉。『福澤論吉全集』第十五卷、P. 265-266。

<sup>8</sup> 内藤湖南、〈台湾政治の大目的（三）〉。『内藤湖南全集』第二卷、P. 406。

福沢は国防と富源の開発と人口過剰問題の解消、その三つの価値から台湾を評価した上で領有すべきであると主張したが、内藤にもその様な主張が明らかに見える。つまり、日清戦争前におけるアジア観が違っていた二人ではあったが、ともに日本の植民地帝国の第一歩を踏み出した事、即ち台湾の領有を高く評価し、そして日本自国の利益という観点から、これから本番である経営に大きな期待を託した。この様に、日清戦後日本を強大な植民地帝国にしようという目標に達させようという考えでは一致しているであろうと考えられる。

## 2、台湾住民に対する処置

台湾における従来住民に対する処置において、まず福沢は台湾人を「未開化の野蛮人」としたことに對して内藤は「開化の期過去りし墮落の民たり」<sup>9</sup>としたということから福沢の主張は内藤のものと大きな相違があると明らかに言えるであろう。福沢によると、台湾領有によって獲得するはずのものは即ちその国防的要地の位置と豊かな自然資源である。従来台湾に居住している者は余計なものであると同時に恐らく日本人の台湾経営を妨げるため、方法を問わずに彼等を台湾から退去させるべきであると唱えた。つまり、福沢の理想としては、台湾を北海道のように完全に日本の一部にしようとし、その方法は単純に白人種のようにアメリカインディアンを駆逐した手段に従えばよろしいというものである。彼は次の様に語った。

「北米合衆國及び加那陀の如き、今こそは純然たる文明國なれども、其本を尋ぬれば蠻民の巢窟にして、其今日ある祖先の白種人が土着の蠻民を其土地より驅逐して自から經營したる結果に外ならず……其處分法は彼のアングロサクソン人種が亞米利加の大陸を開きたる筆法に倣ひ、無知蒙昧の蠻民を悉く境外に逐ひ拂ふて殖産上一切の權力を日本人の手に握り……」<sup>10</sup>

<sup>9</sup> 前掲、〈水野前民政局長を送る〉。『内藤湖南全集』第二卷、P. 386。

<sup>10</sup> 福澤諭吉、慶応義塾編、〈臺灣永遠の方針〉。『福澤諭吉全集』第十五卷、P. 265。

従って、福沢の言論からは台湾住民を文明化しようという意図が見えない。当時の日本外務大臣であった陸奥宗光は『臺灣島鎮撫策ニ關シテ』という意見書にも同様な意見を述べていた。

「我臺灣島占領ノ要旨ハ二端ニ過キス即チ一ハ本島ヲ以テ將來我版圖ヲ對岸ナル支那大陸及南洋群島ニ展弘スル根據地トナスト一ハ本島ノ富源ヲ開拓シテ我工業製造ヲ移植シ通商利權ヲ壟斷セントスルナリ……鎮撫統治ニ關スル政略ノ要義ヲ舉クレハ、  
第一 島民ヲ威壓スルヲ要ス  
第二 支那民族ヲ臺島ヨリ攘逐減少スルヲ要ス  
第三 我國民ノ遷往ヲ獎勵ス」<sup>11</sup>

この史料に書いてあることは、台湾在住の中国人を全部本土に送り返して、代わりに日本人を移住させる、という様なあまり現実的ではない考えもあるが、大体この方針で日本の台湾植民は行われていた。この様に、台湾住民を中国本土へ追い払うために、総督府は弁髪や纏足の禁止等という風俗強制を施行し、厳格に阿片をを取り締まり、抗日勢力の鎮圧に対しては更に残酷な手段を採用した。しかし三百万ほど（実は二百七十余万）という居住する漢民族を中国に送り返すというようなことは、到底できない相談であり、しかも台湾住民は現地に根強く定着しており、退去率は期間の二年が経過しても〇・一六パーセントに過ぎず<sup>12</sup>、総督府の残酷行為はただ反感を買っただけに終わった。この様に、実績が挙がらないうちに統治費用が沢山掛かり、治安も安定せず、地方行政機構も確立していないといった統治困難の状況となった。従って、福沢のこういった台湾を「無人島」<sup>13</sup>として経営すべきである主張は非現実的で、根本的には誤ったものではないかと考えられる。

<sup>11</sup> 山辺健太郎、『現代史資料 21・台湾 1』、1984年、P. 35。

<sup>12</sup> 本稿第三章の脚注 47 をご参照。

<sup>13</sup> 福澤諭吉、慶応義塾編、〈先ず大方針を定む可し〉。『福澤諭吉全集』第十五巻、P. 473。

一方、内藤は台湾人を野蛮人と見なさなかったが、その見方は多分内藤の中華文化に対する尊重の観点と関わりがあると考えられる。内藤の目に写った台湾人は中華文明の下で墮落してしまった民族であり、正しい方法によって台湾人を文明化すればよいと主張した。それも日本の文明宣布の目的であると内藤は強調した。つまり、内藤は積極的に台湾植民地の統治を支え、台湾住民を文明化しようとする意図を明らかに示した。「夫れ既に両民族の相接触するあれば、則ち優等種族が劣等種族に向つて感化を与ふるは自然の理勢にして、其の進路を利導するは、實に文明の播敷を速かにする。」<sup>14</sup>従って、大まかに言えば内藤は同化政策の支持者であると看做し得るであろう。しかし、一概にそのように看做すこともできない。内藤は当時採用された一視同仁策を批判し、台湾人に愛国觀念の養成、その生活品位の向上等をせずに突然文明制度を与えると必ずいろいろな問題が出てくると説き、日本人と台湾人の間にけじめをつけて統治を行うべきと提唱した。要するに、台湾人が日本人と同じレベルの文明程度に達する前に、行政面上、司法面上、更に生活上では全般的に日本人と区別すべきであり、日本人の利益や優越感等を確保するために日本人との間にある程度の距離を置いておこうという考え方を示した。この様であれば、同化というのはそもそもありえない事ではないかと考えられる。また、従来から台湾にいる豪族に対する態度からも福沢と内藤の相違が見出せる。福沢によると、台湾の豪族は正に日本の台湾統治の大障害であり、彼等は台湾の土地や財産を握りながら裏で抗日勢力に物質を支援し続けたゆえ、彼等を強制的に退去させ、かれらの土地や財産を奪うべきであると主張したが、それに反して、内藤は台湾の豪族をはじめに文明化しておくべきであり、その後彼等の影響力を利用して一般の人々を自然に教化することを主張した。

ところが、ここで注目したいのは内藤が提唱した文明宣布、つまり文明化といったものである。周知の通り、文明化というのは即ち西洋化ということであると考えられ、それもまさに福沢の「文明開化」の核心である。ところが、内藤の文明化というものは恐らくその様な物ではない。内藤の論述に見た様に、台湾住民に文明化をある程度達成させるために、奨励を

<sup>14</sup> 内藤湖南、〈台湾政治の大目的（四）〉。『内藤湖南全集』第二巻、P. 407。

通して「邦俗礼服の授与」や日本式の風俗を感化させること等を主張し、そして「現に李春生、辜顯榮、陳春光等の若き、已に斷髮して邦俗に従ふ者あり、若し移易するに其の法を得ば、かの數人者の為す所、以て之を擴充して全島に及ぼし難からざる也。」<sup>15</sup>と、前述した豪族の文明化という実例で内藤は顕著に文明化を「日本化」にして提唱する姿を明示した。要するに、内藤湖南が唱えた文明宣布の使命といったものは寧ろ「日本化」の使命といったほうが適切であり、文明化＝日本化というものは福沢が従来提唱している文明化＝西洋化といったものと明らかに違うであろう。

この様に、福沢の台湾を単純な新日本国に改造するといった考え方は終りに叶わず、統治初期における台湾でかえって植民地主義が施行され、一時的に植民地として日本帝国に位置付けられた。この様な結果はわりに内藤の経営の理想に近いであろう。確かに、明治三十一年（1898年）に民政長官を引き継いだ後藤新平は日本植民地主義を確立しながら、治安や財政や衛生や公共建設等も強行し、植民地開発の「基礎工事」に着手し始め、内藤湖南の台湾に関する経営策と多少同じな方向へ向かって行ったということが言える。例えば、司法制度について、完全に内藤の理想としたような司法制度に改革したといえないが、一定の程度でその大方向へ向かっているのは事実であった。「明治三十一年七月総督府諸官制と共に法院条例を改正し、三級審を改めて二級審となし、高等法院を廃す」<sup>16</sup>とは即ちその事例である。しかし、そうでもないこともある。内地からの移民に関する政策は即ちその一例である。

「一八九七年政府は五百戸の移住計画を立てたが、議会の協賛を得ることができず、其後一九〇六年までといふものは何等植民に関する施設を見なかったのである。……其の原因は三つ程ある。即ち（一）植民の必要を感じなかったこと、（二）台湾の状態が移住に適せず、且つ（三）其効果極めて少なかるべしと思ったためである。……其結果一九〇六年数十戸の植民を得たの初めとして、一九〇九年まで

<sup>15</sup> 前掲、〈移風易俗の一策〉。『内藤湖南全集』第二卷、P. 388。

<sup>16</sup> 東郷実、佐藤四郎。『台湾植民發達史』、1916年、P. 59。

に七九〇人の農民を招致したのである。然るに此等の計画はみな営利を目的とする私人経営により植民は皆小作人ばかりであったが為め、全く失敗に帰して終わった。依つて総督府は一九〇九年から東部台湾に於て官営植民を開始した。」<sup>17</sup>

要するに、福沢と内藤は共に内地からの移住民政策を積極的に推進しようとし、内地人を招くためにいろいろな具体策を総督府に提言したが、事実は統治初期においては殖産興業の機能が働いていなく、統治中期になってようやく系統的な移民活動が始まった事を示している。

以上述べたことから、福沢と内藤の台湾論述を通して百年余り前の日本知識人の台湾像がわかる。この二人の台湾像には明らかに相違が見られるが、統治初期において台湾を日本国内における立憲体制に入れなかった、それとも入れたくなかったといった考えが見てとれる。勿論、福沢は嘗て台湾を純然たる新日本国として日本帝国に入れようとしたが、結局到底出来ない理想であったゆえ、遂に一変して台湾総督に強大な権限を与えるべきと唱え、台湾を独立自治の植民地として日本帝国に属させることを認めざるを得ないようになった。植民地というものは決して福沢諭吉の目指すものではなく、彼が本当に欲したのは新領土であると考えられる。そのような思想は彼のアジアに対する蔑視と侵略の肯定という観点を合わせて日本帝国主義の発展に想像出来ないほどのエネルギーを提供した。

一方、内藤湖南は民族主義である上に、台湾を文明宣布の第一歩として日本帝国の発展上に位置づけ、そして、統治する側と統治される側の文明の格差という議論を用いて台湾の植民地支配を正当化していた。つまり、台湾を日本の一部にせず、植民地として看做したと考えられる。ところが、内藤に対して、台湾というものは単なる植民地に過ぎないわけではなく、恐らく中華文化を中心とする東洋文化の復興に最も理想的な実現するところであると考えられる。台湾は元々中華文化圏に属したし、それに鄭氏政権以来ずっと中国の統治下に置かれていたため、中国、更にアジアを救おうとする模擬試験の場所は台湾にするほかないであろう。この様に、内藤

<sup>17</sup> 浅見登郎、『日本植民地統治論』、昭和三年、P. 285－286。



は台湾において文明である日本人が如何に台湾人を教化するかの対策を示した一方、台湾人と日本人を差別しない一視同仁を激しく批判した。つまり、文明である日本人はその権利や利益が台湾人を同化しているうちに決して損されてはならないと、日本民族の優越感を強調した。その様な思想はその後、日本民族の優越感を強調し過ぎるようになり、変質されて民族拡張主義となってしまった。確かに日本は台湾に文明、それともいわゆる近代化を付与し、周囲の他のアジア地域より近代文明の姿を示させたが、それと同時に台湾を新しい根拠地としてアジアを侵略した。結局、文化面に立つ民族主義という内藤のものがかえって大東亜共栄圏の基礎理論となってしまった。

福沢と内藤は二人とも日本に欧米列強による植民地化の脅威を免れさせようと尽力したが、その様な対欧米の警戒意識が彼らの台湾統治論述にも反映していた。福沢は国防の角度から台湾統治を論述したが、内藤は福沢の様に再三に国防の重要性を強調しなかったけれども、彼は欧米からの武力侵入を防ぐだけではなく、欧米文明の侵入へも抵抗して日本文化を中心とする東洋文明の復興を目指した。こうすれば、台湾植民地における「文明化」よりも「日本化」を強調せざるをえなくなったであろう。それもまさに内藤湖南の台湾植民地における統治論述の特徴であると思う。

何れにしても福沢と内藤の思想は最後にアジアへの侵略と連動して結局危険な思想となってしまった。福沢諭吉はいうまでもなく、侵略の擁護者と考えられるが、それに反して内藤湖南はアジア主義者と言われているが、日本を中国の代わりに新たな東洋新文明の中心にさせるために文明化＝日本化という思想を機能させた結果、全アジアを日本化しようという考えが次第に生じ、それはついに福沢が主張した侵略主義と合わさって侵略を正当化するようになってしまった。従って、内藤湖南の台湾論の方が福沢諭吉のものより更に複雑な構造を持っていることがわかる。